



## 福島原子力事故関連情報アーカイブ

Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	次世代を担う人材への除去土壌等の管理・減容化・再生利用等の理解醸成プロジェクトにおける講義・ワークショップの取組みについて
Alternative_Title	Efforts for lectures and workshops in the project to foster understanding toward the management, volume reduction, and recycling of removed soils for the next generation human resources
Author(s)	万福 裕造(農業・食品産業技術総合研究機構), 保高 徹生(産業技術総合研究所), 鈴木 伸一(日本原子力研究開発機構), 大迫 政浩(国立環境研究所), 竹田 宜人(横浜国立大学), 菊間 由隆(原子力安全研究協会) Manpuku, Yuzo(National Agriculture and Food Research Organization); Yasutaka, Tetsuo(National Inst. of Advanced Industrial Science and Technology); Suzuki, Shinichi(Japan Atomic Energy Agency); Osako, Masahiro(National Inst. for Environmental Studies); Takeda, Yoshihito(Yokohama National Univ.); Kikuma, Yutaka(Nuclear Safety Research Association)
Citation	第 8 回環境放射能除染研究発表会要旨集, p.92 The 8th Workshop of Remediation of Radioactive Contamination in Environment
Subject	セッション：ポスターセッション
Text Version	Publisher
URL	<a href="https://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/182175">https://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/182175</a>
Right	© 2019 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第 8 回環境放射能除染研究発表会要旨集」のデータであり、発表内容に変更がある場合があります。 学会は発表の機会を提供しているもので、内容に含まれる技術や研究成果について保証しているものではないことをお断りいたします。



## 次世代を担う人材への除去土壌等の管理・減容化・再生利用等の 理解醸成プロジェクトにおける講義・ワークショップの取組みについて

万福裕造（農研機構）、保高徹生（産総研）、鈴木伸一（JAEA）、大迫政浩（国立環境研究所）、竹田宜人（横浜国立大学）、菊間由隆（原子力安全研究協会）

### 【はじめに】

除去土壌等の中間貯蔵施設への運搬が進みつつあり、今後は除去土壌等の再生利用や2045年までの県外最終処分に向けて全国的な議論が必要とされている。しかしながら、除去土壌等の再生利用や県外最終処分については、これまでの議論は技術的な側面が中心であり、次世代を担う若手や地域住民に説明する自治体担当者、若手技術者などの次世代の人材育成や、理解醸成を含めたコミュニケーションや合意形成に関する議論は不足している状況にあった。

このような状況の下、次世代を担う学生、若手技術者等の人材育成を目的として、2018年度よりJESCOが公募する「除去土壌等の減容等技術実証事業」において、次世代を担う人材への除去土壌等の管理・減容化・再生利用等の理解醸成に係るプロジェクトを開始した。本プロジェクトは、『技術的内容への理解促進』だけでなく、『本件に関わるステークホルダーの多面性、価値観の多様性を理解し、総合的に見られるようになる。』ことを目的として、(1)コミュニケーションツール（大学等での授業やWEBでの資料を想定）作成、(2)人材育成プログラムを実施している。本稿では、(2)人材育成プログラムに焦点を当て、取組の概要を紹介する。

### 【人材育成プログラム】

人材育成プログラムでは、(1)大学での講義（京都大学、北海道大学、京都府立大学、横浜国立大学の学生が参加）、(2)現地見学、(3)ワークショップ、(4)知識定着や気付きに向けたフォローアップを実施した。具体的な内容を以下に示す。

(1) 大学での講義：コミュニケーションツールに示す6つのテーマ（震災発生からこれまで、土の中の放射性セシウムの挙動、除去土壌等の減容・再生利用、除染活動により発生した除去土壌等の管理・保管、安全・安心、リスクコミュニケーション）について、大学にて講義を実施した。

(2) 現地見学：除染後の復興状況、廃棄物仮置き場、特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま、中間貯蔵施設（受入分別施設、土壌貯蔵施設）、仮設焼却施設を訪問した。

(3) ワークショップ：仮想的な再生利用の事例を想定し、個人ワーク・グループワーク等を通して様々な立場からの捉え方に関して理解を深め、さらに、グループディスカッションにより異なる立場に注目しながら論点を整理した。

(4) フォローアップ：ワークショップ終了後、京都大学、北海道大学にて知識定着に向けたフォローアップを実施した。

### 【理解・認知レベルの変化】

除去土壌の再生資材化とその再生利用に関する現在の考え方について、人材育成プログラムに参加した学生の知識・認知レベルの変化を確認するため、プログラムの事前／事後アンケートを実施した。アンケートの結果から、本プログラムを経験することで（技術的な知識の向上に伴い）、再生利用において「事業に対する住民の理解」や「事業実施者と住民との丁寧なコミュニケーション」が、困難を伴うが重要なポイントである、と認識をする参加者の割合が増える結果となった。また、フォローアップを行うことで、実際に現地を重ねて考察することができる様になり、より具体的な提案や今後の本実証事業の参考となる意見も見られた。

謝辞：本研究は、JESCO「除去土壌等の減容等技術実証事業」の支援を受けた。